

学びほぐす

Unlearn

永田 円了



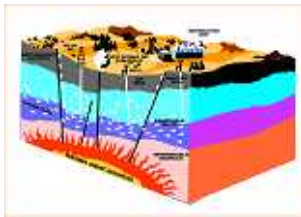
鶴見俊輔氏がハーバード大の学生だった夏休み、ニューヨークの日本図書館でヘレン・ケラーに出会う。

「私はハーバードの学生です」というと、ヘレン・ケラーは、「私はその隣のラドクリフ女子大でもたくさんあなたのことを学んだ。だがその多くを“Unlearn”しなくてはならなかった」と言った。

“I've learned many things, but later I had to unlearn.”



Unlearn とは、単に“捨て去る”“忘れる”(研究社 Collegiate)の意味ではなく、今まで学んだことから、既習の知識に囚われず、いったんふるいにかけてみる、ということである。一言でいえば、“学びほぐす” - 私の大好きなコトバである。既製品のセーターを編み直し、自分の体型に合うよう作り直すこと、という理解しやすい。



“学びほぐし”は容易ではない

今、地熱発電が注目されている。地球のマグマを利用する地熱は、地球温暖化や CO2 の問題は皆無であり、安定したエネルギーを供給できる。火山国の日本では、世界 3 位という地熱資源がありながら、開発に遅れをとっている。技術国日本が、なぜここまで遅れているのか。(NHK クローズアップ現代 4/16/2009)

イニシャルコストがかかるという(地熱発電所一基 150 億円)しかしコストだけの問題なのか。私はコストより、むしろ習慣に根付いた意識の問題であると思う。化石燃料であるオイルは、いつか枯渇すると分かっているが、これを使い続ける。使えば使うほど公害を出すと知りながら、分かっちゃいるけど、止められな~い(スーダラ節)のように、目の前の餌に飛びついてしまう。だから、学びほぐし“Unlearn”が必要になるのである。

アメリカの諺に、「空腹な彼に魚を与えれば、すぐにも空腹は満たされる、しかし、彼に魚の釣り方を教えたなら、彼は一生食べていける」“If you give him a fish, he will have a meal, but, if you teach him how to fish, he will have a living.”がある。目の前の魚に飛びつく、腹が減っているから仕方がないと言う。学びほぐしは容易ではない。



恐れが仕切る現場

化石燃料はいつか枯渇する。なくなると分かっているからこそ、それにしがみつくと。その理由は簡単、なくなるのが怖いからである。怖いからもっと蓄えたいくなる。

昨年大きな波紋を投げかけた、リーマンブラザーズの破綻。この貪欲なるマネーゲームの暴走をなぜ止めることができなかったのか。このゲームもまた、わかっちゃいるけど、やめられな~い、だった。だからこそ、“学びほぐし”が大事になる。この恐怖心をほぐし、人間の最も深い層からのエネルギーの汲み上げが必要となるのである、- 地熱発電のごとくに。

脱・脳化社会のすすめ



“学びほぐし”は容易ではない。手立てはないのか。養老孟司氏は次のように提案する。「違う土地へ行ってみて、違う空気を吸う。人間そうやって自分を変えていく。相手が変わるんじゃない、自分が変わる。自分はいつも同じと思っている人が多いけど、それは違う。むしろかしく言えば“安定的平衡点”に落ち着いている。それが移動することでズレる」(小学館『DI ME』2009.5.5) そう、ズレることで“学びほぐし”ができる。